

格闘技とプロレスに及ぼしたメディアの影響について

A study of relation between martial arts , pro wrestling and media

1K05B240

指導教員

主査 宮内孝知先生

和田 憲征

副査 石井昌幸先生

1 研究の動機・仮説

幼い頃から、プロレス中継を観戦することが毎週の習慣であった。テレビの前で中継画面に噛り付いていたのを思い出す。しかし、観ている最中にふと疑問に思うことがあった。それは、「プロレスの勝敗が決まると同時に、なぜ放送が終わるのか」ということである。

プロレスや格闘技団体にとって、メディアは存続するにあたって重要なパートナーである。その影響で「メディア側の意向を断れずに、勝敗やルールを変えざるをえない現状があるのではないか」という仮説を立てた。本研究では、「プロレス、格闘技」と「メディア」の関係性について、先行文献をもとに調べてみることにした。

2 各章の要約

第1章 プロレスから格闘技までの歴史

力道山によってもたらされた日本のプロレス文化は、ジャイアント馬場とアントニオ猪木によって受け継がれた。ジャイアント馬場は 全日本プロレスで「明るく、楽しく、激しい」の方針を掲げ王道プロレスを展開し、アントニオ猪木は新日本プロレスで「異種格闘技戦」を展開していった。新日本プロレスから UWF(ユニバーサル・レスリング・フェデレーション)という「格闘技色に特化した」プロレス団体が派生した。この UWF が、総合格闘技興行である PRIDE のフィールドを造りあげていくこととなる。一方 K1は、石井和義が率いていた正道会館が主催する新手的キックボクシング興行として立ち上げられた。K1 と PRIDE はプロレスのエンターテインメント性を取り入れた格闘技といえる。

第2章 プロレスに及ぼしたメディアの影響

1954 年に始まった街頭プロレス中継によって、プロレスの立場を劇的に変化させた。プロレスは「テレビ普及の重大要素」となったのである。しかし、日本プロレスが日本テレビとの契約を破ってしまう。ジャイアント馬場の全日本プロレスには日本テレビが、アントニオ猪木の新日本プロレスには NET テレビ(現テレビ朝日)の図式が成立する。この時期より、テレビの力が強くなっていくうちに、プロレス運営に「テレビのコンテンツが必要不可欠」という構図ができた。プロレスとテレビ局の立場が「逆転」していったと考えられる。その後、NET テレビでは頻繁に新日本プロレスの異種格闘技戦を中継していた。これは、負債を返すために、放送時間や番組編成により勝敗や経過を左右させていた事実が見え隠れるのである。NET テレビの意向を新日本プロレス側が断れない状況になっていたと考えられる。しかし、UWF は、ビデオ販売、チケットのインターネット販売やプロレス専門誌の有効活用していった。このような「テレビのコンテンツが必要不可欠」の常識を覆す例も見られた。

第3章 K1、PRIDE が仕掛けたメディア戦略

K1 と PRIDE の繁栄はフジテレビの演出による効果がとても大きい。K1 のメディア戦略は、フジテレビの F1 グランプリに変わるコンテンツとしてスタートした。真剣勝負で生々しい格闘技の中に、プロレスで行われていたエンターテインメント的要素を取り入れたことが成功の元となっていると考えられる。

PRIDE は世間に認知してもらうために、メディアが作り上げた「最強」偶像として扱われていたプロ

レスを利用した事実がある。2000 年にフジテレビが大会の主催者として加わることになり、PRIDE の運営をしている DSE の売り上げの 50 億円のうち、50 パーセントが放映権料などの収入に当たっていた事実がある。「プロレス・格闘技団体の存続」＝「民放のコンテンツ」の図式は未だ根強く残っていることが考えられる。

第 4 章 検証の結果・考察とこれからの展望

力道山の街頭テレビの時代には、プロレスは「テレビ普及の重大要素」とされてきた。しかし、テレビの権限が強くなるにつれて、プロレス運営にと

って「テレビ放映」が必要不可欠になった。両者の立場が逆転し、この構図は現在にまで続いている。それ故、「ファイトマネーの高騰化」と「メディアの意向を断れない過剰演出による偶像化」の 2 点の諸問題を明らかにした。方策として、前者には「メディアの多角化における、PPV 放送への移行」を提案した。そして後者には、「真剣勝負とエンターテインメントの側面を明確にする番組づくり」を掲げた。これらの方策がプロレス・格闘技界とテレビ界に必要不可欠と結論付けた。